

寓話 猫の事務所

作 宮沢賢治

.....ある小さな官衙に関する幻想.....

軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。

書記はみな、短い黒の縞子の服を着て、それに大へんみんなに尊敬されたから、何かの都合で書記をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれも、みんなそのあとへ入りたがってばたばたしました。

けれども、この事務所の書記の数はいつもただ四人ときまっていたからその沢山の中で一番字がうまく詩の読めるものが、一人やっとえらばれるだけでした。

事務長は大きな黒猫で、少しもうろくしてはいましたが、眼などは中に銅線が幾重も張ってあるかのように、じつに立派にできていました。

さてその部下の

一番書記は白猫でした、

二番書記は虎猫でした、

三番書記は三毛猫でした、

四番書記は竈猫でした。

竈猫というのは、これは生れ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはいつてもねむる癖があるために、いつでもからだは煤できたなく、殊に鼻と耳にはまっくろにすみがついて、何だか狸のような猫のことを云うのです。

ですからかま猫はほかの猫には嫌われます。

けれどもこの事務所では、何せ事務長が黒猫なものですから、このかま猫もあたり前ならいくら勉強ができて、とても書記なんかになれない筈のを、四十人の中からえらびだされたのです。

大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫が、まっ赤な羅紗をかけた卓を控えてどっかり腰かけ、その右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫

と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にして、きちんと椅子にかけっていました。

ところで猫に、地理だの歴史だの何になるかと云いますと、

まあこんな風です。

事務所の扉をこつこつ叩くものがあります。

「はいれっ。」事務長の黒猫が、ポケットに手を入れてふんぞりかえってどなりました。

四人の書記は下を向いていそがしそうに帳面をしらべています。

ぜいたく猫がはいって来ました。

「何の用だ。」事務長が云います。

「わしは氷河鼠を食いにベーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだろう。」

「うん、一番書記、氷河鼠の産地を云え。」

一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答えました。

「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ河流域であります。」

事務長はぜいたく猫に云いました。

「ウステラゴメナ、ノバ.....何と云ったかな。」

「ノバスカイヤ。」一番書記とぜいたく猫がいっしょに云いました。

「そう、ノバスカイヤ、それから何!？」

「フサ川。」またぜいたく猫が一番書記といっしょに云ったので、事務長は少しきまり悪そうでした。

「そうそう、フサ川。まああそこがいいだろうな。」

「で、旅行についての注意はどんなものだろう。」

「うん、二番書記、ベーリング地方旅行の注意を述べよ。」

「はっ。」二番書記はじぶんの帳面を繰りました。「夏猫は全然旅行に適せず」とどういふわけか、この時みんながかま猫の方をじろっと見ました。

「冬猫もまた細心の注意を要す。函館附近、馬肉にて釣らるる危険あり。特に黒猫は充分に猫なることを表示しつつ旅行するに非れば、応々黒狐と誤認せられ、本気にて追跡さることあり。」

「よし、いまの通りだ。貴殿は我輩のように黒猫ではないから、まあ大した心

配はあるまい。函館で馬肉を警戒するぐらいのところだ。」

「そう、で、向うでの有力者はどんなものだろう。」

「三番書記、ペーリング地方有力者の名称を挙げよ。」

「はい、ええと、ペーリング地方と、はい、トバスキー、ゲンゾスキー、二名であります。」

「トバスキーとゲンゾスキーというのは、どのようなやつらかな。」

「四番書記、トバスキーとゲンゾスキーについて大略を述べよ。」

「はい。」四番書記のかま猫は、もう大原簿のトバスキーとゲンゾスキーとのところに、みじかい手を一本ずつ入れて待っていました。そこで事務長もぜいたく猫も、大へん感服したらしいのです。

ところがほかの三人の書記は、いかにも馬鹿にしたように横目で見て、ヘツとわらっていました。かま猫は一生けん命帳面を読みあげました。

「トバスキー酋長、徳望あり。眼光炯々たるも物を言うこと少しく遅し。ゲンゾスキー財産家、物を言うこと少しく遅けれども眼光炯々たり。」

「いや、それでわかりました。ありがとう。」

ぜいたく猫は出て行きました。

こんな工合で、猫にはまあ便利なものでした。ところが今のおはなしからちようど半年ばかりたったとき、とうとうこの第六事務所が廃止になってしまいました。というわけは、もうみなさんもお気づきでしょうが、四番書記のかま猫は、上の方の三人の書記からひどく憎まれていましたし、ことに三番書記の三毛猫は、このかま猫の仕事をじぶんがやって見たくてたまらなくなったのです。かま猫は、何とかみんなによく思われようといろいろ工夫をしましたが、どうもかえっていけませんでした。

たとえば、ある日となりの虎猫が、ひるのべんとうを、机の上に出してたべはじめようとしたときに、急にあくびに襲われました。

そこで虎猫は、みじかい両手をあらんかぎり高く延ばして、ずいぶん大きなあくびをやりました。これは猫仲間では、目上の人にも無礼なことでも何でもなく、人ならばまず鬚でもひねるぐらいのところですから、それはかま猫にまんげんけれども、いけないことは、足をふんばったために、テーブルが少し坂になって、べんとうばこがするすると滑って、とうとうがたっと事務長の前の床

に落ちてしまったのです。それはでこぼこではありましたが、アルミニウムでできていましたから、大丈夫こわれませんでした。そこで虎猫は急いであくびを切り上げて、机の上から手をのばして、それを取ろうとしましたが、やっと手がかかるかかからないか位なので、べんとうばこは、あっちへ行ったりこっちへ寄ったり、なかなかうまくつかまりませんでした。

「君、だめだよ。とどかないよ。」と事務長の黒猫が、もしやもしやパンを喰べながら笑って云いました。その時四番書記のかま猫も、ちようどべんとうの蓋を開いたところでしたが、それを見てすばやく立って、辨当を拾って虎猫に渡そうとしました。ところが虎猫は急にひどく怒り出して、折角かま猫の出した辨当も受け取らず、手をうしろに廻して、自暴にからだを振りながらどなりました。

「何だい。君は僕にこの辨当を喰べろというのかい。机から床の上へ落ちた弁当を君は僕に喰えというのかい。」

「いいえ、あなたが拾おうとなさるもんですから、拾ってあげただけでございます。」

「いつ僕が拾おうとしたんだ。うん。僕はただそれが事務長さんの前に落ちてあんまり失礼なもんだから、僕の机の下へ押し込もうと思ったんだ。」

「そうですか。私はまた、あんまり辨当があっちこっち動くもんですから……………」

「何だと失敬な。決闘を……………」

「ジャラジャラジャラジャラン。」事務長が高くどなりました。これは決闘をしろと云ってしまわせない為に、わざと邪魔をしたのです。

「いや、喧嘩するのはよしたまえ。かま猫君も虎猫君に喰べさせようというんで拾ったんじゃないだろう。それから今朝云うのを忘れたが虎猫君は月給が十銭あがったよ。」

虎猫は、はじめは怖い顔をしてそれでも頭を下げて聴いていましたが、とうとう、よろこんで笑い出しました。

「どうもおさわがせいたしましてお申しわけございません。」それからとなりのかま猫をじろっと見て腰掛けました。

みなさんぼくはかま猫に同情します。

それから又五六日たって、丁度これに似たことが起ったのです。こんなことがたびたび起るわけは、一つは猫どもの無精なたちと、も一つは猫の前あし即ち手が、あんまり短いためです。今度は向うの三番書記の三毛猫が、朝仕事を始める前に、筆がポロポロころがって、とうとう床に落ちました。三毛猫はすぐ立てばいいのを、骨惜みして早速前に虎猫のやった通り、両手を机越しに延ばして、それを拾い上げようとしてしました。今度もやっぱり届きません。三毛猫は殊にせいが低かったので、だんだん乗り出して、とうとう足が腰掛けからはなれてしまいました。かま猫は拾ってやろうかやるまいか、この前のこともありますので、しばらくためらって眼をパチパチさせて居ましたが、とうとう見るに見兼ねて、立ちあがりました。

ところが丁度この時に、三毛猫はあんまり乗り出し過ぎてガタンとひっくり返ってひどく頭をついて机から落ちました。それが大分ひどい音でしたから、事務長の黒猫もびっくりして立ちあがって、うしろの棚から、気付けのアンモニア水の瓶を取りました。ところが三毛猫はすぐ起き上って、かんしゃくまぎれにいきなり、

「かま猫、きさまはよくも僕を押しのめしたな。」とどなりました。

今度はしかし、事務長がすぐ三毛猫をなだめました。

「いや、三毛君。それは君のまちがだよ。

かま猫君は好意でちょっと立っただけだ。君にさわりも何もしない。しかしまあ、こんな小さなことは、なんでもありやしないじゃないか。さあ、ええとサントントンの転居届けと。ええ。」事務長はさっさと仕事にかかりました。そこで三毛猫も、仕方なく、仕事にかかりはじめましたがやっぱりたびたびこわい目をしてかま猫を見ていました。

こんな工合ですからかま猫は実につらいのでした。

かま猫はあたりまえの猫になろうと何べん窓の外にねて見ましたが、どうしても夜中に寒くてくしゃみが出てたまらないので、やっぱり仕方なく竈のなかに入るのです。

なぜそんなに寒くなるかというのに皮がうすいめで、なぜ皮が薄いかわからないのに、それは土用に生れたからです。やっぱり僕が悪いんだ、仕方ないなあとか、かま猫は考えて、なみだをまん円な眼一杯にためました。

けれども事務長さんがあんなに親切にして下さる、それにかま猫仲間のみんながあんなに僕の事務所に居るのを名誉に思っよるこぶのだ、どんなにつらくてもぼくはやめないぞ、きつとこらえるぞと、かま猫は泣きながら、にぎりこぶしを握りました。

ところがその事務長も、あてにならなくなりました。それは猫なんていうものは、賢いようではかなものです。ある時、かま猫は運わるく風邪を引いて、足のつけねを腕のように腫らし、どうしても歩けませんでしたから、とうとう一日やすんでしまいました。かま猫のもがきようといったらありません。泣いて泣いて泣きました。納屋の小さな窓から射し込んで来る黄いろな光をながめながら、一日一杯眼をこすって泣いていました。

その間に事務所ではこういう風でした。

「はてな、今日はかま猫君がまだ来んね。遅いね。」と事務長が、仕事のたえ間に云いました。

「なあに、海岸へでも遊びに行ったんでしょう。」白猫が云いました。

「いいやどこかの宴会にでも呼ばれて行ったろう」虎猫が云いました。

「今日どこかに宴会があるか。」事務長はびっくりしてたずねました。猫の宴会に自分の呼ばれないものなどある筈はないと思ったのです。

「何でも北の方で開校式があるとか云いましたよ。」

「そうか。」黒猫はだまって考え込みました。

「どうしてどうしてかま猫は、」三毛猫が云い出しました。「この頃はあちこちへ呼ばれているよ。何でもこんどは、おれが事務長になるとか云ってるそうだ。だから馬鹿なやつらがこわがってあらんかぎりご機嫌をとるのだ。」

「本とうかい。それは。」黒猫がどなりました。

「本とうですとも。お調べになってごらんさい。」三毛猫が口を尖せて云いました。

「けしからん。あいつはおれはよほど目をかけてやってあるのだ。よし。おれにも考えがある。」

そして事務所はしばらくしんとしました。

さて次の日です。

かま猫は、やっとなのはれが、ひいたので、よろこんで朝早く、ごうごう風

の吹くなかを事務所へ来ました。するといつも来るとすぐ表紙を撫でて見るほど大切な自分の原簿が、自分の机の上からなくなって、向う隣り三つの机に分けてあります。

「ああ、昨日は忙がしかったんだな、」かま猫は、なぜか胸をどきどきさせながら、かすれた声で独りごとしました。

ガタッ。扉が開いて三毛猫がはいって来ました。

「お早うございます。」かま猫は立って挨拶しましたが、三毛猫はだまって腰かけて、あとはいかにも忙がしそうに帳面を繰っています。ガタン。ピシャン。虎猫がはいって来ました。

「お早うございます。」かま猫は立って挨拶しましたが、虎猫は見向きもしません。

「お早うございます。」三毛猫が云いました。

「お早う、どうもひどい風だね。」虎猫もすぐ帳面を繰りはじめました。

ガタッ、ピシャーン。白猫が入って来ました。

「お早うございます。」虎猫と三毛猫と一緒に挨拶しました。

「いや、お早う、ひどい風だね。」白猫も忙がしそうに仕事にかかりました。その時かま猫は力なく立ってだまっておじぎをしましたが、白猫はまるで知らないふりをしています。

ガタン、ピシャリ。

「ふう、ずいぶんひどい風だね。」事務長の黒猫が入って来ました。「お早うございます。」三人はすばやく立っておじぎをしました。かま猫もぼんやり立って、下を向いたままおじぎをしました。

「まるで暴風だね、ええ。」黒猫は、かま猫を見ないで斯う言いながら、もうすぐ仕事をはじめました。

「さあ、今日は昨日のつづきのアンモニアツクの兄弟を調べて回答しなければならん。二番書記、アンモニアツク兄弟の中で、南極へ行ったのは誰だ。」仕事がはじまりました。かま猫はだまってうつむいていました。原簿がないのです。それを何とか云いたくても、もう声が出ませんでした。

「パン、ポラリスであります。」虎猫が答えました。

「よろしい、パン、ポラリスを詳述せよ。」と黒猫が云います。ああ、これは

ぼくの仕事だ、原簿、原簿、とかま猫はまるで泣くように思いました。

「パン、ポラリス、南極探険の帰途、ヤップ島沖にて死亡、遺骸は水葬せらる。」一番書記の白猫が、かま猫の原簿で読んでいます。かま猫はもうかなしくて、かなしくて頬のあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴ったりするのをじっとこらえてうつむいて居りました。

事務所の中は、だんだん忙しく湯のようになって、仕事はずんずん進みました。みんな、ほんの時々、ちらっとこっちを見るだけで、ただ一ことも云いません。

そしておひるになりました。かま猫は、持って来た弁当も喰わず、じっと膝に手を置いてうつむいて居りました。

とうとうひるすぎの一時から、かま猫はしくしく泣きはじめました。そして晩方まで三時間ほど泣いたりやめたりまた泣きだしたりしたのです。

それでもみんなはそんなこと、一向知らないというように面白そうに仕事をしていました。

その時です。猫どもは気が付きませんでした、事務長のうしろの窓の向うにいかめしい獅子の金いろの頭が見えました。

獅子は不審そうに、しばらく中を見ていましたが、いきなり戸口を叩いてはいって来ました。猫どもの愕ろきようといったらありません。うろろうろろそこらにあるきまわるだけです。かま猫だけが泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。

獅子が大きなしっかりした声で云いました。

「お前たちは何をしているか。そんなことで地理も歴史も要ったはなしでない。やめてしまえ。えい。解散を命ずる」

こうして事務所は廃止になりました。

ぼくは半分獅子に同感です。

O escritório dos gatos

Kenji Miyazawa

Tradução: André da Silva Castro*

Uma fantasia referente a uma pequena repartição pública...

O Sexto Escritório dos Gatos ficava perto da estação de trem. Ali, pesquisava-se, principalmente, a geografia e a história dos gatos.

Os secretários vestiam roupas de cetim negro e, como cargo de secretário era muito admirado por todos, sempre que, por algum motivo qualquer, um deles se desligava da profissão, todos os gatos jovens das redondezas afobavam-se para ocupar a vaga deixada.

Porém, como o número de secretários do Escritório dos Gatos tradicionalmente estava limitado apenas em quatro, dentre todos os candidatos, era escolhido apenas um deles, o que escrevesse melhor e que soubesse ler poesia.

O chefe do escritório, um enorme gato preto, era um pouco caduco, mas seus olhos eram formidáveis como se fossem várias camadas de fio de cobre esticadas.

Bem, eis seus subordinados:

O Primeiro Secretário era o Gato Branco;
O Segundo Secretário era o Gato Tigrado;
O Terceiro Secretário era o Gato Malhado e
O Quarto Secretário era o Gato do Kamado¹

Um gato de Kamado não é assim por nascença. Pode ser qualquer gato que, à noite, por ter o costume de dormir dentro do kamado, fica sempre com o corpo cheio de fuligem. Especialmente o focinho e as orelhas, por ficarem sujas de carvão, deixam-no com a aparência de um texugo.

Por isso, o Gato do Kamado é repudiado pelos outros gatos.

Assim, normalmente, por mais que tivesse estudos, ele não poderia se tornar um secretário. Porém, como o chefe do escritório era um gato preto, ele foi escolhido dentre quarenta candidatos.

No centro do grande escritório, o chefe Gato Preto estendia sobre sua mesa uma toalha de lã vermelha e sentava-se pesadamente na sua cadeira. A sua direita, o Primeiro Secretário, o Gato Branco, e o Terceiro Secretário, o Gato Malhado; a sua esquerda, o Segundo Secretário, o Gato Tigrado, e o Quarto Secretário, o

Gato do Kamado. Todos sentavam-se corretamente atrás de suas mesinhas.

Mas para que servia a História e a Geografia dos Gatos? Bem, era mais ou menos assim:

Um dia, bateram na porta do escritório.

– Entre! – disse rudemente o chefe Gato Preto, estufando o peito e colocando as mãos² nos bolsos.

Os quatro secretários baixaram as cabeças e ficaram pesquisando nos seus livros de registros, como se estivessem muito atarefados.

O Gato Rico entrou no escritório.

– O que o senhor quer? – disse o chefe.

– Eu gostaria de caçar ratos das geleiras na região de Bering, mas não sei onde seria o melhor lugar.

– Hum... Primeiro Secretário, indique o habitat dos ratos das geleiras!

O Primeiro Secretário abriu um grande livro de registros de capa azul e respondeu:

– Ustelagomena, Novaskaya e a bacia do rio Fusa.

O chefe do escritório respondeu ao Gato Rico:

– Ustelagomena, Nova... O quê você disse mesmo?

– Novaskaya – responderam juntos o Primeiro Secretário e o Gato Rico.

– Sim, Novaskaya. E o que mais?

– O rio Fusa. – Mais uma vez, o Gato Rico e o Primeiro Secretário responderam em uníssono. O chefe ficou um pouco envergonhado:

– Sim, sim, o rio Fusa. Bem, lá deve ser um bom lugar, não?

– E no que eu devo tomar cuidado, durante a viagem?

– Hum... Segundo Secretário, exponha os cuidados a se tomar durante a viagem!

– Sim, senhor. – O Segundo Secretário folheou o seu próprio livro de registros.

– Os Gatos de Verão absolutamente não são adequados.

Ao ouvir isso, todos viraram-se para o Gato do Kamado e olharam feio para ele.

– Mesmo os Gatos de Inverno devem tomar o máximo cuidado – continuou o Segundo Secretário. – E nas proximidades de Hakodate, há risco de ser fígado pela carne de cavalo. E principalmente os gatos pretos, se não mostrarem um comportamento felino satisfatório durante a viagem, poderão ser confundidos com raposas negras e serem perseguidos de verdade.

– Muito bem. É como foi dito – disse o chefe –. E como vossa senhoria³ não

* Bacharel em Letras - UFRGS / Habilitação Tradutor – Português e Japonês ; mestrando em Letras – Tokyo Gakugei University / Japão

¹ Kamado é uma espécie de fogão das antigas casas japonesas. Consistia de um buraco na terra, abaixo do assoalho, onde se colocava a lenha e se acendia o fogo.

² O autor usou o termo mão também no original, provavelmente para dar mais ênfase à leitura alegórica do conto. (NT)

³ Aqui é impossível traduzir de forma adequada o uso dos pronomes pessoais hierárquicos da língua japonesa. Os originais *kiden* e *wagahai* foram traduzidos por “Vossa Senhoria” e “eu”, respectivamente.

é um gato preto como eu, não deve haver nada com o que se preocupar. Basta evitar a carne de cavalo em Hakodate.

– Ah, sim? E quem são os gatos de influência do local?

– Terceiro Secretário, informe os nomes dos gatos de influência da região de Bering!

– Sim. Ahm, da região de Bering... aqui... Dois Gatos, Tobasky e Genzosky, senhor.

– Mas e que tipo de gatos são Tobasky e Genzosky?

– Quarto Secretário, dê um breve resumo de Tobasky e Genzosky!

– Sim, senhor. – O Gato do Kamado, o Quarto Secretário, já estava esperando a pergunta, com cada uma das mãos dentro de seu livro de registros marcando os lugares de Genzosky e Tobasky. Com isso, tanto o chefe Gato Preto como o Gato Rico ficaram muito impressionados.

Porém, os três secretários, com cara de desprezo, olhavam de soslaio para o Gato do Kamado e riam. O Quarto Secretário leu com empenho seu livro de registros:

– O Chefe Tobasky possui moral elevada. É perspicaz, mas demora para dizer qualquer coisa. O rico Genzosky demora antes de dizer qualquer coisa, mas é perspicaz.

– Ah, sim. Entendi. Obrigado.

O Gato Rico foi embora.

Desta maneira, o escritório era muito útil aos gatos. No entanto, há apenas seis meses após a história acima, o Sexto Escritório dos Gatos acabou sendo desativado. O motivo disso todos já devem ter percebido: o Quarto Secretário, o Gato do Kamado, era muito odiado pelos seus colegas superiores. Principalmente pelo Gato Malhado, que queria muito fazer o trabalho do Gato do Kamado. Este último, tentando ser bem visto aos olhos dos colegas, tentava de tudo, mas sempre causava uma impressão contrária.

Por exemplo, um dia, o Gato Tigrado colocou seu bento na escrivaninha, mas quando foi comer, teve um súbito ataque de bocejos.

Foi aí que o Gato Tigrado esticou o quanto pode os dois braços e soltou um grande bocejo. Isto, entre os gatos, mesmo na frente de um superior, não é nenhuma falta de respeito. Entre humanos, é como alisar o bigode e não ter nenhuma importância. O problema foi quando a mesa inclinou por ele ter esticado as pernas, fazendo a caixa de bentô⁴ deslizar e cair com um grande baque no chão, na frente do chefe. A caixa ficou um pouco amassada, mas, como era de alumínio, não tinha problema, não quebrou. Então, o Gato Tigrado conteve rapidamente o bocejo e, de cima da escrivaninha, esticou a mão e tentou pegar a

caixa. Mas suas mãos mal encostavam nela e ele não conseguia pegá-la com direito, fazendo-a ir de um lado para o outro.

– Você não consegue alcançar – disse rindo o chefe Gato Preto, enquanto mastigava um pedaço de pão. Nesse momento, o Quarto Secretário, o Gato do Kamado, que estava abrindo a tampa de seu próprio bento, vendo isso, levantou-se rapidamente, juntou a caixa e tentou devolvê-la ao Gato Tigrado. Porém, este enfureceu-se de repente e, além de não pegar o bento que o Gato do Kamado lhe oferecia, colocou as mãos para trás, sacudindo o corpo e gritando com rudeza:

– O quê? Você está me mandando comer esse bento? Está me mandando comer esse bento que caiu no chão?

– Não, é que você estava tentando pegar a caixa, então eu só juntei ela para você.

– Quando que eu tentei pegá-la? Hem? Eu só achei que, como ela caiu na frente do chefe, era um pouco desrespeitoso, então eu só estava tentando empurrar a caixa para baixo da minha escrivaninha.

– Ah, é? Mas é que a caixa ia para lá e para cá...

– O quê, seu mal-educado? Eu te desafio para...

– Aham, aham! – O chefe Gato Preto pigarreou com força. Ele atrapalhou o Gato Tigrado de propósito, para que ele não dissesse “eu te desafio para um duelo!”.

– Parem de brigar! Acho que o Gato do Kamado não juntou o bento para fazê-lo comer. Além disso, tinha me esquecido de falar hoje de manhã, mas você ganhou um aumento de dez Sen, Gato Tigrado.

O Gato Tigrado primeiro estava com uma cara furiosa. Mesmo assim, escutava o chefe. Porém, logo começou a rir de felicidade.

– Queira me desculpar pelo transtorno, senhores. – Depois virou-se para o Gato do Kamado, lançou-lhe um olhar venenoso e sentou-se na cadeira.

Pessoal, eu tenho pena do Gato do Kamado.

Então, após alguns dias, aconteceu de novo um fato parecido com este. Havia duas razões para que isso ocorresse com frequência: a primeira é que os gatos são animais preguiçosos; a segunda é que as patas dianteiras deles, ou seja, os braços, são curtas.

Dessa vez, o Terceiro Secretário, o Gato Malhado, antes de começar o trabalho pela manhã, deixou o lápis rolar para o chão. Não querendo passar trabalho, o Gato Malhado fez como o Gato Tigrado: esticou os braços por cima da escrivaninha e tentou pegar o lápis. Igual à outra vez, os braços não alcançaram. Como o Gato Malhado era muito baixo, ele foi se esticando cada vez mais, até quase cair da cadeira. O Gato do Kamado ficou indeciso se pegava o lápis ou não por causa do fato anterior. Hesitou o quanto pode em pegar o lápis, porém, logo não conseguiu mais suportar aquela cena e levantou-se da cadeira.

Justamente nessa hora, o Gato Malhado esticou-se demais e deu uma camba-

⁴ Bento – marmita japonesa.

lhota no ar, batendo com a cabeça na escrivaninha e caiu no chão. O barulho foi tão grande que o chefe Gato Preto assustou-se e pegou da estante atrás dele a garrafa de amônia, para despertá-lo. Porém, o Gato Malhado logo se levantou e perdendo a compostura, disse num ímpeto:

– Gato do Kamado, você me empurrou, não é?

Desta vez, no entanto, o chefe, apaziguando o Gato Malhado, disse:

– Não, Malhado. O erro foi seu. O Gato do Kamado só se levantou por gentileza. Ele nem tocou em você. Mas você não vai ligar para uma coisa pequena como essa, não? Bem, e quanto ao registro de mudança de endereço de Santontan?

O chefe Gato Preto rapidamente voltou às suas ocupações. Assim, não tendo outra alternativa, o Gato Malhado voltou ao trabalho. Mas, como era de se esperar, volta e meia encarava o Gato do Kamado com um olhar agressivo.

Como podemos ver, o Gato do Kamado sofria de verdade.

Para se tornar um gato comum, o Gato do Kamado tentou muitas vezes dormir fora de casa, mas em todas as madrugadas fazia frio e ele sofria ataques de espirro. Portanto, não tinha jeito, tinha de voltar para dentro do kamado.

O fato de ele sentir muito frio era porque ele tinha uma pele muito fina. E ele era assim porque tinha nascido no dia de Doyo⁵. “É, eu devo ser ruim mesmo, não tem jeito, pensava o Gato do Kamado, com os olhos cheios de lágrimas. “Mas como o chefe está sendo tão gentil e meus amigos acham uma honra o fato de eu trabalhar nesse escritório, não importa o quanto seja difícil, eu não vou sair! Eu vou suportar tudo!”, monologava ele, apertando o punho em meio às lágrimas.

O chefe Gato Preto, entretanto, não se mostrou digno de confiança. Isso é porque os gatos parecem espertos, mas na verdade são animais idiotas. Um dia, o Gato do Kamado teve o azar de pegar uma gripe e também ficou com o pé inchado como uma wan⁶. Ficando impossibilitado de caminhar, teve de faltar ao trabalho. Era indescritível vê-lo se debater de dor. Ele chorou, chorou e chorou. Chorou o dia inteiro, esfregando os olhos, observando os raios amarelos do sol que penetravam pela janela da sua pequena casa.

Enquanto isso, no escritório:

– Puxa, o Gato do Kamado ainda não chegou, né? Está atrasado, né? – disse o chefe Gato Preto durante o intervalo.

– Ah, ele deve ter ido à praia se divertir, não? – disse o Gato Branco.

– Não, ele deve ter sido convidado para alguma festa! – disse o gato Tigrado.

⁵ Doyo é um período de dezoito dias que antecede cada estação do ano. No Japão, é particularmente notado o Natsu no Doyo, ou seja, os dezoito dias que antecedem o verão. Este período também coincide com o surgimento da estrela Sirius (a *Estrela do Cão*) junto com o sol, que vai de três de julho a onze de agosto. (NT)

⁶ Espécie de tigela arredondada, usada como recipiente para comidas e bebidas, nas refeições.

– E hoje tem alguma festa? – perguntou o chefe, espantado. Ele achava impossível que houvesse uma festa de gatos para a qual ele não fosse convidado.

– Ouvi falar que tinha uma cerimônia de abertura de uma escola, na região norte.

– Ah, é? – O chefe Gato Preto ficou pensativo.

– Acontece que o Gato do Kamado – começou o Gato Malhado – está sendo muito solicitado nas redondezas. Dizem que ele anda falando coisas como: “Eu vou ser o próximo chefe do escritório!” Por isso, a gatalhada fica com medo e o bajulam até não poder mais.

– É verdade isso? – Enfureceu-se o chefe Gato Preto.

– É sim. Vá observá-lo e veja com seus próprios olhos – insistiu o Gato Malhado. – Isso é um ultraje! E logo eu que o favoreci tanto! Mas ele não perde por esperar! Eu também tenho uma idéia.

O silêncio tomou conta do escritório.

Até que chegou o dia seguinte.

A pata do Gato do Kamado finalmente desinchou e ele, alegre, foi de manhã bem cedo para o escritório, no meio da ventania que assobiava. Ao chegar, o Gato do Kamado viu que seu tão estimado livro de registros, o qual ele acariciava e admirava a capa, não estava no seu lugar; ele estava dividido em três partes, em cima das outras escrivaninhas.

– Ah, ontem eles deviam estar muito ocupados! – disse ele numa voz rouca. Sem saber por que, seu coração disparou.

A porta abriu-se e o Gato Malhado entrou.

– Bom dia. – O Gato do Kamado levantou-se e o cumprimentou, mas o outro sentou-se calado. Depois, começou a folhear o seu livro de registros, como se estivesse cheio de tarefas para fazer.

O Gato Tigrado entrou no escritório.

– Bom dia. – O Gato do Kamado levantou-se e o cumprimentou. Porém, o Gato Tigrado nem sequer virou-se para ele.

– Bom dia. – Disse o Gato Malhado.

– Bom dia. Puxa, que vento forte, né? – O Gato Tigrado também começou imediatamente a folhear o seu livro de registros.

Chegou o Gato Branco.

– Bom dia – cumprimentaram juntos o Gato Tigrado e o Gato Malhado.

– Ah, bom dia. Que vento horrível, não? O Gato Branco também pôs-se ao trabalho, muito ocupado. Nesse instante, o Gato do Kamado levantou-se sem vontade e, calado, fez uma mesura ao Gato Branco. Este fez como se não o conhecesse.

A porta abriu-se e se fechou.

– Puxa, mas que vento! – disse o chefe Gato Preto – Bom dia.

Os três gatos levantaram-se rapidamente e fizeram mesuras. O Gato do Kamado fez sua saudação vagarosamente, olhando para baixo.

– Parece um vendaval, não? – disse o Gato Preto, sem olhar para o Gato do Kamado e começando logo o trabalho.

– Bem, continuando a pesquisa de ontem, quero a resposta sobre os irmãos Amoníack. Segundo Secretário, qual dos irmãos Amoníack foi para o Pólo Sul?

O trabalho começou. O Gato do Kamado continuava calado, de cabisbaixo. Não tinha o seu livro de registros. Queria dizer alguma coisa sobre isso, mas a voz não saía.

–Pan, Polaris – respondeu o Gato Tigrado.

– Muito bem. Dê-me mais detalhes sobre Pan Polaris – disse o chefe Gato Preto. Ah, mas esse é o meu trabalho, pensou o Gato do Kamado, quase chorando. Meu livro de registros, meu livro de registros!

– No retorno da expedição ao Pólo Sul, Pan Polaris morreu próximo ao arquipélago de Yap. Foi sepultado no mar. – Disse o Gato Branco, o Primeiro Secretário, lendo o livro de registros do Gato do Kamado. Este ficou tão triste, mas tão triste que suas bochechas ficaram salgadas. Ele continuava cabisbaixo, lutando contra a pressão sentida no ambiente.

O escritório ficou movimentado como água borbulhante e o trabalho avançava. Às vezes, os outros gatos viravam-se para o gato do Kamado e olhavam-no de soslaio sem dizer nenhuma palavra.

Chegou o meio-dia. O gato do Kamado ficou parado, de cabeça baixa, com as mãos apoiadas nos joelhos e nem comeu seu bento que trouxera.

E logo a partir de uma hora da tarde, ele já começara a chorar. Ele ficou chorando e parando, chorando e parando por umas três horas, até o fim do expediente.

Mesmo assim, todos fingiam não notar o fato e trabalhavam como se estivessem se divertindo.

Foi nesse instante que aconteceu: os gatos não tinham percebido, mas, da janela atrás do chefe Gato Preto, podia-se ver a cabeça dourada de um leão feroz.

O leão, desconfiado, ficou olhando o interior do escritório por um longo tempo. Então, ele bateu na porta de súbito e entrou no recinto. Não é preciso dizer o pavor dos gatos. Eles só ficavam zanzando de um lado para o outro, sem saber o que fazer. Apenas o gato do Kamado parou de chorar e ficou de pé, em posição de sentido.

O leão, na sua voz firme, disse:

– O que vocês estão fazendo? Para ficarem brigando, não há necessidade de Geografia ou de História. Parem com isso! Eu ordeno a dispersão de vocês!

Com isso, o escritório foi desativado.

Eu meio que concordo com o leão.

Português

Tradução: Ana Raquel Salgado

Ana Gabriela Petit Flamant

Revisão: Maria Lucia Machado de Lorenci

Jane Tutikian (1952)

Nasceu em Porto Alegre (RS). É formada em Letras pela UFRGS e doutora em Literatura Comparada. Atua, na mesma Universidade, como professora de literatura na graduação e pós-graduação. Colaborou com diversos jornais (Correio do Povo, Folha da Tarde, Jornal do Brasil, etc.). Participou de várias antologias e seus contos foram traduzidos para o inglês e o espanhol.

Cíntia Moscovich (1958)

Nasceu em Porto Alegre (RS). Escritora, jornalista, mestre em Teoria Literária, foi diretora do Instituto Estadual do Livro do Rio Grande do Sul. Em 1995, foi a ganhadora do Concurso de Contos Guimarães Rosa, da Rádio France Internationale, Paris. Em 2004, publicou a coletânea de contos “Arquitetura do Arco-Íris”, também pela Record, livro que lhe valeu o terceiro lugar em contos no Prêmio Jabuti, além da indicação para o Prêmio Portugal Telecom de Literatura Brasileira e para a primeira edição do Prêmio Bravo Prime de Cultura.